様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３４５０３
研究種目：挑戦的研究（萌芽）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ１９８３７

研究課題名（和文）出所後に子育てが必要な女子受刑者への刑務所内支援モデルの開発

研究課題名（英文）Development of an in-prison support model for female inmates with mothering roles who need to raise children after release.

研究代表者
望月　明見（Mochizuki, Akemi）

大手前大学・国際看護学部・講師

研究者番号：３０２８９８０５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：「受刑経験のある母親と子どもとの関係構築と社会復帰後の体験」では、受刑経験のある母親を対象とした質的研究を行い、出所後の母親という役割側面からの養育の困難と社会復帰時の葛藤を明らかにした。また、子のいる受刑中の母親役割を持つ女性受刑者の養育に関わる健康課題を調査した量的研究では、トラウマ的な子ども時代の養育体験の多さやメンタルヘルスの問題、犯罪からの回復といった背景が浮き彫りとなった。これらの研究成果を、子のいる女性受刑者のケアに関係しているまたは興味のある医療関係者や職員への勉強会を通して、今後の支援に対する考察や啓蒙活動を行うことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
子どものいる受刑者の支援を行うことは、受刑者の社会復帰支援にとどまらず、子どもの福祉の観点からも非常に重要である。本研究では、受刑経験を持つ地域生活者の子のいる女性と、子のいる受刑者を対象とする調査を行うことができた。この研究により、受刑経験を持つ地域生活者の女性の子育ての現状と課題から支援ニーズを明らかにすることができた。また、子のいる受刑者の虐待傾向につながる養育意識からは、出所後の養育時に懸念される虐待を予防できるニーズを明らかにできたと考える。これらの研究の結果は、受刑者が地域で安定した子育てを行えること目指した受刑中の子育て支援への一助になると考える。

研究成果の概要（英文）：The project has provided suggestions for support for female prisoners.
A qualitative study was conducted with mothers who had experienced prison sentences in "Mother-Child Relationship Building and Post-Reintegration Experiences." The study revealed the difficulties of raising children from the perspective of their role as mothers after release from prison and their struggles upon reintegration into society.
In addition, a quantitative study was conducted to investigate health issues related to childcare from the perspective of their role as mothers during their incarceration among female inmates with children. The study highlighted the background of many traumatic nurturing experiences in childhood, mental health issues, and recovery from crime. The results of these studies were discussed and educated for future support through study sessions for medical professionals and staff involved or interested in the care of female inmates with children.

研究分野：生涯発達（看護）

キーワード：受刑者　養育態度　社会復帰　親業　支援ニーズ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

受刑している母親の多くが、トラウマ経験(convigton 2003)、精神不安定(convigton 2003、Glaze&Maruschak 2008)、アルコール・薬物依存(Glaze&Maruschak 2008)といった親子関係に影響を及ぼす問題を抱えている(Arditti&Few 2008)。また、その子どもは、母親の刑務所入所に関連した感情的な混乱（Siegel 2011)や、子どもが乳幼児の場合は、愛着形成への影響が考えられ（Thompson 1998)、反社会的行動から犯罪の世代間連鎖リスクとなることが指摘されている(K.Alison 2001)。海外では、親である女子受刑者に対するParentingプログラムが実施され(Claire et al., 2011, Goshin S and Byrne W,2009)母親である女子受刑者の更生や、家族関係の再構築といった、子どもへのポジティブな影響に働きかける母子支援をすでに行っている。

子育ての必要な女子受刑者への支援に考慮されなくてはならないことは、刑務所退所後の生活における母親の経験(Brown&Bloom 2009, Convigton 2003)だと言える。しかし、日本においては、海外と同様の複雑な背景や問題が推測されるが、子育てが必要な女子受刑者の、受刑中から受刑後の養育実態を把握した研究は皆無である。本研究はこれまでのわが国にはない、子育ての必要な女子受刑者に注目したものであり、刑務所内での子育てが必要な女子受刑者の支援の在り方を考え、出所後の社会復帰や更生、社会的ハイリスク母子の支援に大きく貢献できるものである。

２．研究目的

本研究は、受刑経験を持つ地域生活者の女性と、出所後に子育ての必要な女子受刑者の子育ての現状と課題から支援ニーズを明らかにする。そして、地域で安定した子育てを行えること目指した受刑中の子育て支援モデルを構築することである。

３．研究の方法

本研究は、出所後に子育ての必要な女子受刑者が、地域社会で安定した子育てを行うためのニーズを明らかにするために、１）受刑経験を持つ地域生活者の子のいる女性を対象とした研究を行った。この研究では、受刑を経験した子どものいる女性が、刑務所出所後の社会復帰の中で、子どもとの関係性を再構築していくプロセスを明らかにし、子どもをもつ女子受刑者や刑務所を出所した母親への子の養育に関する支援の示唆を得ることを目的とした。グラウンデッドセオリー法を使用した質的研究法である。また、２）子のいる受刑者を対象とする研究では、法務省成人矯正課実施した「子どものいる受刑者の現状と課題に係る調査」のデータを利用した。これは無記名自記式質問紙による横断調査であった。調査場所は、日本にある全女子刑務所11か所と、全国に65か所ある男子刑務所のうちの19か所であった。調査実施をした男子刑務所の選定については、法務省矯正局が全国の地理的に異なる地区を代表することを考慮して選択している。調査期間は、2020年11月から2021年の2月の間で実施された。研究参加者は、釈放が決まった囚人であり、釈放前に2週間行われる出所後の社会復帰プログラムに参加している者であった。得られたデータのうち、18歳未満の未成年の子どもを持つ受刑者の174名を最終サンプルとした。男性79名（45.4%）、女性95名（54.6%）であった。これらのデータをもとに統計的手法を使用した量的研究を行った。

４．研究成果

１）の質的調査【結果】①親子関係再統合の困難、②親準備性の問題、③母親自身のメンタルヘルスの問題、④受刑中の子の養育者との関係再構築の困難、⑤孤立した養育環境、⑥経済的自立の困難、があることが導き出された。【考察】親自身が虐待的な子育てをうけていることが多いことから、良いモデルとなる親の不在は自分の子育ての虐待リスクをあげる可能性が考えられた。罪を犯した母親というレッテルは、社会的規範とスティグマによるストレスが生じ、「母親として生きること」の生きづらさが、子供や家族との関係の再構築にネガティブな影響を及ぼしていた。子のいる女子受刑者の受刑後には、子どもとの分離の延長が多く経験されていることが明らかになった。そして、受刑後の養育に関連すると考えられる要因として、・受刑中の子どもの養育者との関係・子どもとのつながりの強さ（受刑前の関係性や養育状況、年齢など）・受刑後の養育サポート者の存在・本人の養育態度（能力）があると考えられた。特に受刑後の養育サポート者との関係性に関しては出所後の子育てに大きく影響することが明らかになった。

２）の量的調査からは①18歳未満の子どもを持つ受刑者の養育実態と出所後の親子再統合の認識に影響を及ぼす要因、②18歳未満の子どものいる受刑者の虐待傾向につながる養育意識③子のいる受刑者の虐待傾向につながる養育意識の類型化を明らかにした。①の重回帰分析の結果から、出所後の養育可能性の認識には、受刑中の子の養育者との連絡、親権、 出所後の子育て支援者の有無、パートナーの有無が要因となることがわかった。ロジスティック回帰分析のオッズ比では、親権が12.6、パートナーの有無が7.6　であった。②の虐待に関連する養育意識では、「子育ての責任と不安」「子より自己欲求優先」「子育ての自信のなさ」「体罰肯定」「子への嫌悪感」5因子が見出された。③では、クラスター分析による養育態度の類型化を行い、体罰肯定群、体罰リスク群、ネグレクト群、ネグレクトと体罰肯定群が見出された。以上 の結果より、子のいる受刑者の出所後のニーズや虐待に関連した養育態度への介入のニーズを明らかにできた。

最終年度には、これらの知見をもとに、刑務所に 関わる医療職や受刑者の支援に関心のある人へ、子のいる受刑者への出所後の養育支援のため支援や介入のあり方について考える勉強会を開催した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>望月明見　佐々木彩子 | ４．巻<br>132 |
| ２．論文標題<br>18歳未満の子のいる受刑者の養育実態から考える支援ニーズ | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>刑政 | ６．最初と最後の頁<br>22－33 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>望月明見 | ４．巻<br>74 |
| ２．論文標題<br>刑務所における母親としての気持ちを支える援助～受刑後の親子再統合につなげるために～ | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>助産雑誌 | ６．最初と最後の頁<br>432‐436 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>望月明見 |
| ２．発表標題<br>.受刑中に出産した女性たちの母親になるための戦略 |
| ３．学会等名<br>日本フォレンジック看護学会 |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>望月明見、橋爪由美 |
| ２．発表標題<br>受刑経験のある母親と子どもとの関係性再構築と女性の社会復帰後の体験 |
| ３．学会等名<br>日本母性衛生学会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>望月明見、天谷和美、成田伸 |
| ２．発表標題<br>栃木県助産師会における女子刑務所でのウイメンズヘルス支援の実践報告と課題の検討 |
| ３．学会等名<br>日本助産師学会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>望月明見、森田展彰、小池純子、新井清美 |
| ２．発表標題<br>更生保護施設における女性薬物事犯への支援に関する研究 |
| ３．学会等名<br>日本アディクション看護学会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>望月明見 |
| ２．発表標題<br>更生保護施設における女性薬物事犯への支援状況と課題 |
| ３．学会等名<br>更生保護学会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究分担者 | 小池　純子<br>(koike junko)<br>(00617467) | 国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター・精神保健研究所　地域・司法精神医療研究部・流動研究員<br>(82611) | |

６．研究組織（つづき）

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究分担者 | 成田　伸<br>(Narita Shin)<br>(20237605) | 自治医科大学・看護学部・教授<br>(32202) | |
| 研究分担者 | 田村　敦子<br>(Tamura Atuko)<br>(70724996) | 自治医科大学・看護学部・准教授<br>(32202) | |
| 研究分担者 | 橋爪　祐美<br>(Hashizume Yumi)<br>(40303284) | 筑波大学・医学医療系・准教授<br>(12102) | |

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|